

17 世紀初頭セビーリャにおけるイエズス会のための絵画 —ベラスケス《東方三博士の礼拝》とその周辺—

諸星妙（日本学術振興会特別研究員）

大司教座を有するスペイン南部の一大宗教都市セビーリャでは、16 世紀後半から 17 世紀初頭にかけて新しい修道院が相次いで建設され、各修道院はその装飾の華麗さを競った。なかでもイエズス会は同市内に 6 つの付属施設を有し、その装飾には当時のセビーリャの主要画家が関わっていた。

ディエゴ・ベラスケスは、そのような環境の中で活動した画家の一人で、ボデゴン画を蒐集する知的貴族からの庇護を受ける一方で、修道会のための作品を描いた。しかし先行研究は、ボデゴン画の成立に重要な役割を果たした知的貴族の研究に重きを置き、初期宗教画とそれに関連する修道会については十分な検討を行っていない。

本発表では、当時のセビーリャで勢力を誇った修道会のうち、ベラスケスの師パチェーコが密接な関係を有していたイエズス会に注目し、その付属施設であるサン・ルイス修練院のために描かれたと考えられているベラスケスの《東方三博士の礼拝》（1619 年、プラド美術館）について考察する。同作品について、各人物が画家の家族の肖像になっているという説を提起したミゲル・セレーラの論考（1999 年）以外に、目立った研究はない。しかし、前景に描かれた茨のモチーフについては、ポルトゥス（1999 年）がイエズス会の思想との興味深い関連を指摘した。イエズス会は教化における絵画の効用を認め、それを積極的に利用した修道会であり、本作の図像の理解には、イエズス会の思想と絵画についての考察が不可欠である。

セビーリャのイエズス会誓願修道院の主祭壇装飾を巡る二度の画家交代劇（1604-06 年）は、この問題を検討する上で重要な事例である。注文主のフアン・デ・ラ・サルは、ベラスケスの《東方三博士の礼拝》の委嘱にも関係していたと推定されている人物で、最終的にロエーラスにより完成された作品は、当時、イエズス会がその装飾において平明で自然な表現を重視したことを示している。マルティン・デ・ロアなどイエズス会士のテキストからも、そのことは裏付けられる。また、聖イグナティウスは『靈操』のなかで、観想の際、現場に身を置き、五感を働かせることが重要だと述べている。サン・ルイス修練院は若い修練士が霊的修練を行う場であり、ベラスケスの作品は、リアリティー溢れる人物表現と若い王を手前に配する点で、この場に飾られるのに相応しい特徴を兼ね備えていることを指摘できよう。さらに、キリストが裸でない点には、イエズス会士の言葉を引用し、誓願修道院のロエーラス作品における裸のキリストを批判したパチェーコの図像論の影響が認められる。他方、マギの豪華でない衣装や作品全体の地上的な雰囲気は、パチェーコの図像論とも同時代の同主題作品とも異なる独自な特徴であり、誓願修道院でルセンテ・ダ・コレッジョの古風な作風よりもロエーラスの斬新さを選んだ注文主ラ・サルを満足させるものだったと考えられる。

ベラスケスは、イエズス会修練院の新たな要請に応えるべく、以上に見た諸情勢を踏まえ、伝統的なテーマを革新的に表現し、ロエーラス去りし後のセビーリャ画壇で自らの画風を鮮烈に提示したのである。